

第五章

「革命」の問題：自由の創設と暴力——ルカーチと R. ルクセンブルク

前章では、共産党入党の決断をめぐって展開した、ルカーチの思想における倫理と政治の結合のプロセスについて検討した。そのなかで、一方において、政治の「悲劇性」という認識が獲得され、他方において、「文化」の問題から「形式」という時代の課題は引き継がれながらも、革命をどう実現するかという具体的で現実的な「戦術」の問題が彼にとって切実なものになる。事実、『戦術と倫理』の公刊以降、ハンガリーでの革命政権の樹立とその崩壊、それにともなうヴィーンでの亡命生活の期間、彼はアクチュアルな政治論文を立て続けに発表する。そして、そうした現実政治との関わりのなかでマルクス主義について独自の理解に到達し、その成果として公刊されたのが『歴史と階級意識——マルクス主義弁証法に関する諸研究』である。

本章では、共産党入党から『歴史と階級意識』に至る時期のルカーチの革命論を、文化の観点からでもなければ、またマルクス主義思想史研究の観点からでもなく、より包括的な観点から、つまり現代の政治思想研究において最も重要な争点の一つである「公共性」の観点から分析する。というのも、公共性をめぐる政治思想研究において、現在でも中心的な位置を占めている H. アレント自身は、公共性を他ならぬ「革命」という政治的現象との強い結びつきにおいて論じているからである。彼女にとって、諸々の革命の経験は、現代世界における公共性の再生という課題に取り組むうえで、非常に重要な手がかりを与えてくれるものなのである。したがって、彼女の革命論を手がかりにルカーチの思想を分析することは、その現代的な意義と問題点との解明に役立つように思われる。

1 政治的自由の再生としての革命——アレントの革命論

革命という政治的現象についてアレントは『革命について』において次のように述べている。「近代の革命を理解するうえで決定的なのは、自由の理念と新しいはじまりの経験とがその出来事において結合しているということである」(UR. 34/三八)。ここでの「自由」は内面の自由や選択の自由ではなく、古代のポリスに見られたような「政治的自由」ないし「公的自由」のことである(UR. 159/一九〇)。それは抑圧や生命の必然性からの「解放」

を条件とするが、しかしそれから自動的に帰結するものではなく、「他者がその場に居合わせて、人間の諸活動を見、判断し、そして最終的にそれらを記憶する」場合にのみ現われる (UR. 34-37/三九-四二)。したがって、それは集会所、^{アゴラ}広場、ポリスなど人びとが集まることのできる「公的空間」を必要とする (UR. 37/四二, 159/一九〇)。アレントが近代の革命のうちに見出したのは、こうした古代ギリシア・ローマの根本経験としての「自由 - 内 - 活動 (In-Freiheit-Handeln)」であった (UR. 40/四五)。ここから彼女は革命を「自由の創設」として、さらには「自由の公的な現われの空間を保証する政治的共同体の創設」として規定する (UR. 160/一九一)。しかし、それは古代的な自由の単なる復古ではなく、一つの「新しいはじまり」でもある。彼女によれば、革命は政治体の権威が無傷の場合には不可能である (UR. 148/一七八, 202/二四一)。つまり革命は過去の伝統との断絶を前提とする¹。そして、この歴史的断絶は近代化によってもたらされたとされる。したがって、アレントにとって革命とは、古代の政治的自由ないしそれを可能にする公的空間を、近代的な条件のもとで新しく創設しようとする試みなのである。革命の精神とは、「[近代の] 大衆社会のただなかで誰もがそのときの公的事柄に参加することができるような新しい統治形態への希望」に他ならない (UR. 341/四二〇)。革命は「近代に特有の」現象なのである (UR. 34/三八)。

革命に関するアレントの議論をよりよく理解するには、『革命について』を彼女のもう一つの著作『人間の条件』と関連づけて読解することが有効である。というのも、後者には、彼女が政治的自由の再生の条件と考える近代化に関する議論が主題的に展開されているからである。二つの著作の内容を総合的に分析するならば、アレントの思想において、古代との断絶をもたらした近代化には大別して二つの側面、つまり社会化と世俗化の側面があると考えられる。ところが、この社会化と世俗化は、革命の前提条件でありながら、同時に革命の実現を困難なものにするものとして描かれる。

第一に、社会化とは、家政的な活動力が公的空間へと侵入し、古代ポリスの前提であった私的領域と政治的領域との境界が取り払われることによって、国民を政治的な組織形態とする一つの家族としての「社会」が出現する過程である (VA. 38-43/四九-五四)。こうして成立した社会においては、人間の複数性に対応する「活動」に代わって生命の維持のみ役立つ「労働」が公的空間の相貌を規定する (VA. 59/七一)。その結果として「われわれの活動と言論の能力は、私的領域と親密圏へと追いやられ、明らかにその特質は損なわれてしまった」 (VA. 61/七四)。そして、生命の必然性が公的領域を支配するのに応じて、

革命の目的は自由の創設から貧困という「社会的問題」の解決に転換してしまう（UR. 73-74／八九-九〇）。この場合、革命は暴力を用いざるをえなくなるとアレントは主張する。なぜなら、生命の必然性からの解放には暴力が不可欠だからである²。必然性が私的領域に属していた古代ポリスにおいては、この暴力は前政治的なものと考えられていた（VA. 41／五二）。しかし、近代になってこの暴力は必然性ととも政治的領域に入り込み、革命の現象と結びつくと、他ならぬ「政治的領域、すなわち人びとが真に自由でありうる唯一の領域を破壊した」のである（UR. 146）。

第二に、世俗化とは、世俗的権力が教会の権威から解放され、世俗的権威が宗教的認証を喪失する過程である（UR. 207-209／二四七-二四九）。このなかで「宗教、権威、伝統の太古のローマの三位一体」が崩壊する（UR. 150／一八〇）。その結果として、近代の統治形態はその安定性を保証する権威の「超越的で彼岸にある正当性」を奪われてしまう。そのため、過去の伝統に頼らずに新しい権威を確立することが革命の課題となる（UR. 207-208／二四七-二四九）。ここにおいて革命は、統治形態を基礎づけるものとして新しい絶対者を探求するという「絶対者の問題」に衝突してしまう（UR. 205／二四四）。つまり、絶対者の必要性は新しい統治形態の基礎づけにおける独裁的暴力の行使を正当化し、人間の複数性という政治の相対的性質は神的な絶対性に置き換えられてしまうのである（UR. 46-47／五二-五三）。

ここから次のように理解することができよう。つまり、アレントが革命の諸経験に着目するによって提起しているのは、近代的条件のもとでポリス的な政治的自由はいかにして再生されるのか、そしてそのとき暴力は不可避であるのかという問いなのである。彼女の診断によれば、周知の通り、アメリカ革命とは対照的にフランス革命は結局社会的問題と絶対者の問題に躓いて挫折し、革命と暴力の結びつきを自明のものにしてしまった。その結果として、ロシア革命においてもフランス革命に倣って暴力が行使されたと彼女は主張する。「根本的に変化した条件と状況において、あたかも昔の劇をもう一度世界史の舞台上演することが問題となっていたかのように、ロシア革命の人びとは意識的にフランス革命の経験にあわせて行動した」（UR. 70／七九）。

このように公共性という観点からロシア革命を痛烈に批判するアレントは、しかしながら、そのなかで R. ルクセンブルクのボルシェヴィズム批判を例外的にとりあげる。彼女はそれを「ロシアで実際に起こっていたことに対する驚くべき洞察」として高く評価する（UR. 340／四一九）。そして、彼女は R. ルクセンブルクに依拠しつつ、ロシア革命においても「評

議会」という全く新しい制度が民衆のなかから「自然発生的に (spontan)」生じ、そこでは各人による公的生活への参加が目指され、したがって評議会のなかには確かに政治的自由は存在していたのだが、ボルシェヴィキ党の独裁がそれを抑圧してしまったのだと主張するのである (UR. 338-342/四一七-四二二)。

したがって、本章では、革命に関するアレントの問題設定を共有しつつ、その枠組みのなかでルカーチの革命論を分析するために、アレントが高く評価した R. ルクセンブルクの革命観に対する批判が当時のルカーチの革命論の基盤をなしている事実を重視し、ルカーチの R. ルクセンブルク批判を主題的に扱う³。なぜなら、彼の批判は、革命の相次ぐ挫折の経験に由来するものであり、R. ルクセンブルクの革命論の枠組みでは革命の現実的な課題とその困難さを理解しえず、したがって革命と暴力の関係を適切に扱うことはできないという認識を示していると考えられるからである。この認識にもとづいて、彼は革命の実現にとっての暴力の必要性を改めて容認する。そこで以下では、まず R. ルクセンブルクの「ロシア革命のために」(一九一八年)におけるボルシェヴィズム批判の論理を確認し(2)、その批判に対して、ルカーチが革命の挫折の原因をどのようにとらえ返し、そしてどのようなディレンマに直面するのかを明らかにし(3)、そこから、この時期のルカーチが革命における暴力行使をどのような論理にしたがって改めて肯定するのかを解明する(4)。そして最後に、アレント的な「公共性」の観点から、ルカーチ政治思想の問題点について検討する(5)。

2 R. ルクセンブルクのボルシェヴィズム批判——自由による自由の創設

R. ルクセンブルクがボルシェヴィズムを批判するのは、革命の民主的なあり方を擁護するためである。その際彼女は「すべての革命時代の歴史的な経験」に訴える (RR. 354/三三)。ボルシェヴィズムは民衆の政治参加よりも党の看板を優先するが、歴史的経験が示しているのは、むしろ「民衆感情の生き生きとした流動体」が絶えず革命に「新しい精神」を吹き込むということである (RR. 354/三四)。もちろん、民主的な制度も人間の制度であるかぎり限界と欠陥をもっている。しかし、社会制度の欠陥を正すことのできる「生き生きとした泉」は、「きわめて広汎な人民大衆の活動的な、妨げられることのない、精力的な政治的生活」以外にはありえない (RR. 355-356/三六)。それゆえ、ボルシェヴィズムに見

られる民主主義全般の否定は、革命に対する矯正力の「泉を埋める」ことに等しい (*ibid.*)。そして、民衆の活動的な政治的生活の実質は「自由」によって構成される。R. ルクセンブルクは、民衆の「公的生活と政治的活動」を保証するものとして「出版の自由」と「結社と集会の権利」を挙げ (RR. 358/三九)、これらの自由について次のように説明する。

政府の支持者のためだけの自由、ある政党の党員のためだけの自由は——彼らの数がどんなに多くても——決して自由ではない。自由とは、つねに、異なった考え方をする者たち (*die Andersdenkenden*) の自由のことである。それは、「公平」の狂信主義のゆえにではなく、政治的自由の活性力、治癒力、および浄化力が、異なった考え方をする者たちの自由というこの本質にかかっているからであり、もし「自由」が特権となれば、その効果が失われるからである。(RR. 359, Anm. 3/四一)

「政治的自由」の本質をなす「異なった考え方をする者たち」の自由が、民衆の「公的生活」を実質的に構成する。つまり公的生活は、異なった考え方をするという意味での他者の存在を構成的な条件とするのである。

とはいえ、R. ルクセンブルクはこのような公的生活を民衆が容易に送れるとは考えていない。なぜなら、革命主体である民衆は、ブルジョアジーの支配のもとですでに精神的に墮落してしまっているからである。したがって、革命の実現にはまずなによりも「数世紀にわたるブルジョア的階級支配によって貶められてきた大衆の全面的な精神的変革」が必要となる⁴。(RR. 360-361/四三)。この「精神的変革」とは、「利己主義的な本能」から「社会的本能」への、「怠惰」から「大衆のイニシアティヴ」への転換を意味する (RR. 361/四三)。そして、彼女は「レーニンほどこのことをよく知り、切々と語り、執拗に繰り返している者はいない」という (RR. 361/四三)。しかし、「レーニンは手段を完全に間違えている」と彼女は異議を唱える (*ibid.*)。レーニンがとった「命令、工場監督官の独裁的暴力、過酷な処罰、恐怖政治」といった手段は「一時的な緩和剤」でしかない (RR. 361-362/四三)。このような独裁理論の前提にあるのは、「出来あがった処方箋が革命政党の鞆のなかにあつて、あとはそれをただ精力をあげて実現すればよい」という考えである (RR. 359/四一)。しかしながら、革命の実現は「完全に未来の霧のなかにある」(*ibid.*)。それゆえ大衆は政党の綱領に全面的に依拠することはできず、実際に革命のなかで多くを経験し学ばねばならない。「ただ経験だけが訂正し、新しい道を拓くことができる」(RR. 360/四二)。そして、こうした大衆の「政治的な訓練と教育」の場、換言すれば「政治的経験の泉」をなすのが彼らの公的生活なのである (RR. 359/四〇)。再生への唯一の道は、「公的生活と

いう学校そのもの、無制限のきわめて広汎な民主主義、公的な意見 (öffentliche Meinung) 』である (RR. 362/四三)。公的生活のなかで異なった考え方をする者たちが「自由な意見闘争 (Meinungskampf) 』 (RR. 362/四五) を通じて公的な意見を形成することで、政治的な訓練と教育が蓄積されていく。かくして、R. ルクセンブルクは次のように主張する。「これ [=大衆の精神的墮落] に対しては、過酷なテロルの措置は無力である。逆に彼らはいっそう腐敗する。唯一の解毒剤は、大衆の理想主義と社会的活動、つまり無制限の政治的自由である⁵」 (RR. 361, Anm. 1/四四)。革命を促進するのは、独裁的暴力ではなく、公的生活のなかでの他者との自由な討論なのである。

もっとも、R. ルクセンブルクも革命における暴力的な措置をすべて拒絶しているわけではない。「社会主義は一連の暴力的措置を前提としている」 (RR. 360/四二)。しかし、このようにいうとき、彼女は現行の社会秩序の「解体」と新しい社会秩序の「建設」とを区別する (ibid.)。「解体」とは、私有財産を廃止することによって、形式的な平等と自由の下に隠れている経済的な不平等と不自由を除去すること、つまりブルジョア的経済構造の破壊である (RR. 363/四七-四八)。これは彼女にあっても「独裁」という形をとる。しかし、「[ブルジョア民主主義に替わる] 社会主義的民主主義は、社会主義経済という下部構造がつくりだされたときにはじめて、それまで一握りの社会主義独裁者たちを忠実に支持してきたお行儀のよい民衆のために用意されたクリスマスプレゼントとして、約束の地ではじまる、というものではない」 (RR. 363/四八)。革命の実現は、ブルジョア的な経済＝「下部構造」を解体するだけでは十分でなく、「社会主義的民主主義」という新しい社会秩序の建設という積極的な行為をも必要とする。そして、「否定的なもの、つまり解体は命令することができるが、建設という肯定的なものは命令することができない」 (RR. 360/四二)。革命における暴力は経済的問題に限定され、新しい社会主義的社会の建設の「前提」にすぎない。したがって、彼女のいう「独裁」は「極めて広汎な公共圏における、人民大衆の極めて活動的な、妨げられることのない参加のもとでの、無制限の民主主義における独裁」なのである (RR. 363/四七)。

このように、R. ルクセンブルクにとって革命は単に経済的不自由の解体だけでなく、政治的自由を保証する新しい社会の建設をも目的とする。しかも、その実現手段自体が民衆の公的生活における政治的自由である。したがって、彼女の考える革命は〈自由による自由の創設〉と特徴づけることができる。しかし、ここにおいて、自由のないところで自由という手段を調達することはいかにして可能かという難問が生じる。より特定化すれば、

大衆の精神的墮落という条件下で彼らの公的生活をどう維持するのかという問題である。ところが、彼女の革命論の枠組みのなかでこの問題は生じえない。なぜなら彼女の革命論の根底には次のような独特の歴史観があるからである。

社会主義的な社会体制は、ただ歴史的産物であるべきであり、またそうありうるのであって、それは、経験という独自の学校から、期が熟すなかで、生きた歴史の生成から、生まれてくる。生きた歴史は、究極のところ有機的自然 (organische Natur) の一部であり、したがって有機的自然とちょうど同じように、現実の社会的要求とともにつねにその充足のための手段も、課題と同時にその解決ももたらすという素晴らしい習慣をもっているのである。そうだとすると、社会主義は、その本性 (Natur) からして、押しつけられえないものであり、指令によって導入されえないものであるということは明らかである。(RR. 360/四二——強調引用者)

「歴史」は「自然」の一部であるかぎり、政治的自由という「現実の社会的要求とともにその充足の手段ももたらす」のであり、したがって大衆の公共精神のないところにも彼らの公的生活は自然に現われるのである⁶。ルカーチの R. ルクセンブルク批判はこの点を焦点にして展開されることになる⁷。

3 ルカーチのディレンマ——革命の挫折と物象化

ルカーチから見て R. ルクセンブルクの革命論の根本的な誤りは、「歴史的発展の有機的な性格の過大評価」にある (GK. 453/四五四)。これは資本主義から社会主義への移行を「自然成長 (Hineinwachsen)」とみなす歴史の方法に由来する (GK. 455/四五六)。この方法のもとでは、「必然の王国」から「自由の王国」への飛躍は「運命のプレゼント」としてとらえられざるをえない (SA. 138/二四一)。もちろん彼も「R. ルクセンブルクは革命の時期の必然的な逆戻り、修正、過誤について全く明瞭に認識していた」ことを認める (GK. 455/四五六)。しかし、彼によれば、「発展のなかの有機的な要素を過大に評価する彼女の傾向は、「現実の社会的要求とともにつねにその充足のための手段も、課題と同時にその解決も」もたらされるという——独断的な——確信のなかのみ示されている」(ibid.)。そして、彼女が「自然成長」的な歴史の方法を採用するのは、彼女が経済と政治・イデオロギ―とを区別しているにもかかわらず、両者の関係については「古典的な見解」を無批判的に受

け継いでいることに起因する (SA. 137/二三九)。その見解とは、大衆の活動は経済危機の「自動的な帰結」として「自然発生的に」生じ、大衆の意識は経済状態の「表現」でしかないというものである (SA. 137/二四〇)。

こうした革命の有機的な性格ないし自然発生性に対する過大評価を、ルカーチもまた「経験」に訴えて論駁する。「ここ数年の革命の経験は革命の自然発生性の限界を非常に鮮明に示した」(SA. 140/二四三)。ここでの経験とは、ロシア革命に端を発したヨーロッパ各地での一連の革命の挫折に他ならない⁸。彼によれば、革命の挫折の原因は「プロレタリアートのイデオロギー的危機」のうちにある (SA. 139/二四三)。つまり、革命を実現するための経済的・社会的な諸前提はすでに与えられていたにもかかわらず、プロレタリアートの階級意識は依然として資本主義的なままであったのである (GK. 486/五〇六)。こうした状況においては、資本主義的経済構造の解体という前提が整ったとしても、そこから大衆の革命的な建設行為が自然発生すると想定することはもはやできないのである。プロレタリアートのイデオロギー的危機は、政治・イデオロギーと経済との関係についての「経済主義的」な見解を否定する (GK. 482/四九八)。それゆえ、彼の考える革命も単に資本主義的経済の破壊ではなくプロレタリアートの「イデオロギー的変革」を要求することになるが (cf. GK. 492/五一四, 435/四二四, 503/五三一)、しかし彼の場合「イデオロギー的変革は、確かに経済的な危機の結果として……生じてきたものではあるが、しかしながらその経過は決して客観的な危機そのものと自動的・「法則的な」平行関係をもつことはない」とされる (GK. 487/五〇七)。ここにおいて、大衆の精神的変革は自然発生性にゆだねられることなく、それ自体で一つの独立した革命の課題となる。かくしてルカーチは、R. ルクセンブルク批判とは別に、革命の挫折の原因をさらに深く追及していく。

ルカーチによれば、その原因は資本主義の構造に見出される。そのとき、プロレタリアートのイデオロギー的危機は「プロレタリアートの意識の物象化」としてとらえ返される (GK. 487/五〇六)。物象化とは、資本主義の原理が「すべての「自然的限界」を止揚し、人間相互の関係全体を純社会的関係へと転化する」ことによって成立した近代社会に特有の現象である⁹ (GK. 361/三一五)。こうした「社会化」の所産である近代資本主義社会では、「商品」が社会的関係の「普遍的カテゴリー」となる (GK. 260/一六六)。商品構造の本質は、人間的関係が物的関係の性質を帯び、なおかつその構造のなかで生きる人間の意識もその物的性質にとらわれることによって、物的関係の出自である人間的関係の痕跡がすべて人間の意識から隠されてしまう、ということのうちにある。このように人間の意識

が社会的関係の物的性質にとらわれている状態が「物象性」に他ならない（GK. 257／一六二）。そして、商品構造を本質とする社会的関係が「普遍的」であるということは、プロレタリアート自体も資本主義社会の産物でしかないことを意味する。それゆえ、プロレタリアートもブルジョアジーと同様にその意識が物象化されることを免れない（GK. 332／二七三）。このように革命主体そのものが現行社会の構造にとらわれたままであったことが、革命を敗北に追いやったとルカーチは考えるのである。

それでは、物象化現象は実際どのようにして「自由」の創設行為としての革命を困難なものにするのか。ルカーチによれば、人間相互の関係が商品関係としての物的性質を帯びることによって、そこに生きる人びとは人間の特性と能力を外界のさまざまな対象と同様な「物」として「所有し」「譲渡する」ようになる（GK. 275／一八七）。その結果として、人間は相互に孤立化され抽象的な個人としてアトム化される（GK. 265／一七二）。現行の資本主義社会での自由とは、「物象化されかつ物象化する財産によって孤立化された個人の自由」、つまり「利己主義の、自己閉鎖の自由」である（GK. 492／五一四）。

このように自由を利己主義的な閉鎖性へと変形する物象化の効果が最もグロテスクに示されるのは、ジャーナリズムにおいてであるとルカーチは主張する（GK. 275／一八七）。この観点から、彼はすでに「報道出版の自由と資本主義」（一九一九年）において「出版の自由」を批判していた。これによれば、出版の自由は、資本主義的社会秩序の典型的な産物以外のなにものでもない。なぜなら、その成立の社会的な基盤は「意見 (Meinung) が商品になる」ということのうちに存するからである（PK. 154／三二一）。それゆえ、出版の自由とは、市場での自由競争のなかで意見という商品を「生産」し「販売」する自由でしかないのである（PK. 154-155／三二一）。さらに「意見表明の自由 (Meinungsfreiheit) 」も「見せかけの自由」である。なぜなら、それは意見を「購入」できる者だけのための自由だからである（PK. 155／三二一）。それに対して、意見を生産・販売する者は「肉体労働者」と同一の状態にある。なぜなら、彼らの自由は「餓死するか、それとも資本家たちに有利な条件で強制労働をするかの選択の自由」でしかないからである（PK. 155／三二一-三二二）。このように、資本主義社会における大衆の政治的自由は、商品構造と切り離しては存在しえず、それは実質的には資本家の特権か、生命維持を基本的な活動様式とする労働者の自由でしかない。こうした事態は裏を返せば、商品構造の原理が公的領域の全体に浸透していることを示している。つまり、自由な意見闘争は経済的な自由競争にとって代えられ、公的な討論という言語を媒体とする人間的関係は、商品を媒体とする物的関係によって駆

逐されるのである¹⁰。経済的自由による政治的自由の浸蝕、これが物象化現象の内実である。

このような物象化現象はルカーチに次のようなディレンマを突きつける。すなわち、大衆の政治的自由が私的-経済的自由にすり替えられてしまっている状況のなかで政治的自由を再生しようとする場合、その手段として他ならぬその政治的自由に頼ることはもはやできないというディレンマである。R. ルクセンブルクが革命に対する矯正力の泉とみなしたものは、ルカーチの眼にはすでに枯渇してしまったものとして映らざるをえない。それでは、このような状況において革命はどのような仕方になされるべきであるとルカーチは考えるのであろうか。この文脈においても、経済的なものを利用したブルジョアジーの支配に対抗する政治的形式としての党の意義が論じられることになる。

4 敵との闘争と前衛党——自由の抑圧による自由の創設

ルカーチは革命の現実的な状況として「革命の純粹にプロレタリア的な性格」を前提にすることは「幻想」であるという (GK. 479/四九四)。プロレタリアートのイデオロギー的危機が示しているのは、労働者大衆の行動が「必然的にプロレタリア革命の方向へと規定されていることは決してないし、またありえない」ということ、あるいは「彼らの運動は、確かに——事情によっては——革命を促進することもありうるが、しかしそれと同じだけ容易に、反革命的な方向をもとりうる」ということである (GK. 480/四九五)。それゆえ現在では、経済過程が自然発生的に大衆運動を引き起こすという安定的な社会状態にあるのではなく、社会的な諸勢力の「根本的な編成替え (Umgruppierung)」がなされていると認識されるべきである (GK. 483-484/五〇一)。経済主義的な観点からは把握しえないこうした状況において革命を実現するには、経済的な変革だけであとは自然発生性に任せるのではなく、政治的な措置が必要となる。それは、社会の編成替えによって解放された諸勢力を、それらが純粹にプロレタリア的であるかどうかにかかわらず、「プロレタリア革命のために (für) 動員する」ことであり、逆からいえばそれらの勢力を「反革命へと組織化されつつあるブルジョアジーに対抗して (gegen) 結集する」ことである (GK. 449-450/四四八-四四九)。

この革命のための、あるいは反革命に対抗する動員・結集の具体的な様相を、ルカーチはメンシェヴィキとボルシェヴィキとの闘争を例にして描写する。彼によれば、「メンシェ

ヴィキは公然とあるいは隠然とブルジョアジーの陣営へと移行し (*übergehen*)、革命的なプロレタリアートやその他の本能的に反抗的な階層に対して敵対的な前線に立っている」(GK. 466/四七二)。したがって、革命の過程において「まず最初にプロレタリアートが分裂し、内面的に二つに引き裂かれたまま闘争に移るだろう」ということが認識されねばならない (GK. 465/四七一)。つまり、プロレタリアートのイデオロギー的危機は、階級闘争における「区別」を曖昧にし、本来は対立・衝突するはずの陣営のあいだでの「移行」を促進するのである。この流動的かつ無節操な政治状況においては、闘争の形態を「討論」としてとらえるべきではない。なぜなら、この状況において「討論」はただのお喋りとして無界限に続くだけだからである。かりに討論を通じて一定の結論が導きだされたとしても、それはつねに「多義的 (*mehrdeutig*)」であり、したがって「義務づけ」を免れる (GK. 478/四九一)。

また、物象化によって言語を媒体とする関係が商品関係にとって代えられているなかで、メンシェヴィキが「革命についての見解の正しさによって「説得」されうるなどと当てにすることは空しい希望でしかない」(GK. 465/四七一)。それゆえ、メンシェヴィキとボルシェヴィキとの内面的分裂を「意見の相違」とみなしてはならない (GK. 465/四七〇)。しかし他方において、それを単に経済的利害の対立としてとらえるならば、経済主義的見解の轍を踏むことになる。革命を実現するためには、それをあくまで政治的な対立としてとらえなければならない。かくしてルカーチは、メンシェヴィキを「「異なった意見 (*andere Meinung*)」をもつ革命家たちの一つの思潮」としてではなく、「革命の敵 (*Feind*)」として規定すべきだと主張する (GK. 467/四七四)。革命の友と敵の区別こそが、物象化現象のもとで革命を実現するために必要な政治的動員・結集つまり「集団化 (*Gruppierung*)」(GK. 467/四七三)の基準なのである。彼にとって革命と反革命の対抗関係とは、公的生活のなかで意見の異なった者たちが行なう自由な討論でも、経済市場での自由競争でもなく、友と敵の闘争なのである¹¹。

こうした革命の友と敵の闘争の担い手としてルカーチが挙げるのは「組織」である。その理由を彼は次のように説明する。

〔革命の実現に必要な〕人的素材は、必然的に、資本主義社会のなかで教育され、その社会によって墮落させられている人間から成り立っている。……資本主義が存続するかぎり、人間の内面的な変革を期待することはすべてユートピア的な幻想であろう。まさしくそのために、こうした事態がひとを墮落させるような結果を阻止し、そうし

た結果の不可避的な発生をただちに訂正し、それによって生じた弊害を除去するのに適している、組織的な予防措置と保証が探求され発見されなければならないのである。

(GK. 512-513/五四四)

そのために、組織は物象化の影響を免れた存在でなければならない。しかしそれは、「非常に高度の階級意識」をもち (GK. 498/五二二)、「正しい理論」にもとづいて行動する存在 (GK. 504/五三四)、つまり「革命的階級のうちで最も意識的な部分である前衛」に他ならない (GK. 497/五二二)。ここにおいてルカーチは、現行社会の彼岸にたち、新しい社会秩序の創設を基礎づける〈絶対者〉が革命の実現には不可欠であることを承認しているのである¹²。

したがって、ルカーチは革命の民主的なあり方を批判する。すでに見たように、R. ルクセンブルクにとっては、民衆の活動的な政治的生活のもとで民主的な制度は革命的な役割を果たしうる。彼女は議会制度に対して次のように一定の肯定的評価を与える。「われわれはいかなるブルジョア的議会においても、ときおり「民衆の代表」のきわめて愉快的な跳躍を体験するのであり、そしてその跳躍は突然「新しい精神」によって活性化され、全く予期しなかった発言を引き起こすのである」(RR. 354/三四)。これに対してルカーチは、彼女が指摘した議会の革命的な変化は「事実の確認」としては正しいという (GK. 455/四五七)。しかし、この変化は決して自然発生的に生じたのではない。ここでも意識の物象化、つまりイデオロギー的危機が考慮されなければならない。「純粹に「民主的な」権力集団は、崩壊の時代にある程度おのずから生じ、すべての権力を強奪したけれども、同じように——この集団を担っている〔イデオロギー的に〕不明瞭な階層の逆行的な運動のために——突然あらゆる権力を剥奪されてしまうのである」(GK. 485/五〇四)。したがって、その議会での変化は、「当時最も強烈に革命を前進させていた諸要素の革命的な組織が、革命を阻止する諸要素を議会の諸団体からつねに暴力的に遠ざけ、これらを革命の立場にふさわしいかたちに改造した」ことの結果とみなされなければならない (GK. 455-456/四五七——強調引用者)。大衆の公共精神が利己主義へと墮落し、言語を媒体とした人間的関係そのものが消失している状況においては、意見を自由に交換し討論する場である議会の革命的変革を、公的な討論そのものを通してもたらすことは不可能である。それは、革命と反革命の敵対関係のなかでの、組織による「暴力的」な、つまり非言語的な動員・結集によってもたらされざるをえないのである。

ルカーチは「評議会」の樹立の仕方についても同じ論理にもとづいて議論を展開する。

彼によれば、現状において言葉による批判はブルジョアジーにとって耐えうる「空文句」にとどまる以上、討論という闘争形態は評議会の創設を妨げるものでしかない（FP. 98／九二）。評議会はむしろ友と敵の闘争のなかで「ブルジョアジーの抵抗から引き離して奪う」べきものなのである。（FP. 103／九八）¹³。このように考えるならば、R. ルクセンブルクは「革命の現実的な状態において諸勢力の集団化を誤って評価した」ことになる（GK. 467／四七三）。ルカーチにとって政治を構成する他者は、異なった意見をもつ存在ではなく敵である。この観点から革命の過程における「自由」の位置は次のように規定される。「自由はそれ自体で一つの価値であることはできない。自由はプロレタリアートの支配に奉仕しなければならず、しかしプロレタリアートの支配が自由に奉仕してはならない」（GK. 469／四七六-四七七）。革命において問題となるのは、「いかにして「自由」が革命的で反革命的でない機能を保つべきか」である（GK. 467／四七四）。つまり自由・不自由ではなく、革命・反革命の対立軸が決定的なのである。かくしてルカーチは、「ボルシェヴィズムの「自由の抑圧」の革命的な性格」を承認する（*ibid.*）。彼の考える革命は〈自由の抑圧による自由の創設〉なのである。

5 政治的なものと社会的なもの境界

ルカーチは R・ルクセンブルクが信じた公的生活を営む民衆の存在を「幻想」として退けた。しかし、その代替案として彼が提示した前衛党もまた、自由な主体が存在しないところに自由を創設することはできるのかという解決不可能なディレンマを解決してしまうという意味において、革命主体の「神話」であるといえることができる¹⁴。それは、敵対関係の一義的な区別にもとづく、党员への組織的規律の義務づけである。そこで最後に、この神話をもたらす暴力肯定の論理に潜む問題点とそこから導き出される課題について若干考察することによって、本章の結びに代えたい。

これまで見てきたように、ルカーチの革命論において、暴力は生命の必然性や経済構造の解体といった社会的問題の解決のためではなく、政治的自由のための公的空間の創設行為にとって必要なものとみなされている。このような暴力の必要性の根底にあるのは、物象化論から導出された、現行の資本主義社会において公的-政治的自由は現われることができないとする診断である。この診断は、革命の性質に決定的な転換をもたらすように思わ

れる。つまり、自由は社会の彼岸へと追いやられ、それによって革命の「究極目的」と化する。ここにおいて革命は、アレントの枠組みを用いるならば、もはや自己目的的な「活動」ではなく、目的-手段の戦術的連鎖¹⁵のもとでの「制作」として表象される。それとともに自由の抑圧は、自由の王国を「作る」という目的を達成するための手段として正当化されうることになる¹⁶。そして、活動から制作への転換は、革命が友と敵の闘争としてとらえられることによってさらに確実なものとなる。アレントによれば、「制作がある対象を生み出す手段であるように、活動が目的のための手段となってしまう」事態は、「本来の共同性 (das eigentliche Miteinander)」が破壊され、戦争時のように人びとが「相互に友と敵に分かれて (für-oder gegeneinander)」行動する場合に起こる (VA. 221/二九三)。その場合、活動は「一定の目標を自分自身のために、そして敵に対抗して、達成するために暴力手段を用いる」ことでしかなくなるのである (ibid.)。

さらに、アレントは「官僚制」と暴力とのつながりを指摘する。「公的生活の官僚制が進めば進むほど、暴力の魅力は増大する」(CR. 178/一五九)。なぜなら官僚制とは「すべての人が政治的自由、つまり活動するための権力を奪われている統治形態」に他ならないからである (ibid.)。そして近代の歴史における官僚制の過程は「党の官僚機構の勃興」によって著しく促進された (CR. 178/一六〇)。この党の官僚制こそロシア革命において評議会を崩壊させ、革命を挫折に追いやった原因なのである。アレントは R・ルクセンブルクから次の箇所を引用する。「普通選挙、無制限の出版と集会の自由、自由な意見闘争がなければ、あらゆる公的な制度のなかでの生活は死滅して見せかけの生活となり、そこには官僚制だけが活動的な要素として残る」(RR. 362/四五 - 四六, cf., UR. 340/四五五)。

このようなアレント-ルクセンブルク的な立場からすれば、友と敵の闘争の担い手とされる前衛党は、党の官僚制を具現するものに他ならず、結局は革命の成功を妨げるものでしかないであろう。しかしながら、ここで注意すべきは、ルカーチの前衛党論が官僚制批判を踏まえているという点である¹⁷。彼において党の官僚制はその物象化として問題化される。しかもこの問題の深刻さは、官僚制が単に「西欧的な組織形態」(GK. 473/四八五)や「ブルジョア的な党」(GK. 495/五一九)だけでなく「共産党」自体にも及ぶという点にある。「この傾向 [=物象化] は……共産党においてもさらに影響を与えざるをえない。この傾向は、あらゆる共産党が合目的な行為を必要としていることが、硬直化、官僚主義、腐敗などの危険を必然的に含んでいる広汎な即物的な分業を押しつけば押しつけるほど、ますます強くなる」(GK. 513/五四四)。このように、ルカーチの前衛党論は、官僚制批判

にもとづきながらも同時に官僚制化を促進しようという逆説的な論理を内に含んでいるのである。このことは、官僚制批判が決して容易ではないことを示唆しているといえる。

また、友と敵の闘争という革命の規定を批判する際にも一定の注意が必要である。ルカーチがそのような闘争を呼びかけざるをえなかったのは、物象化現象のもとで意見が商品化し公的な討論が形骸化していると彼が考えたからである。この考えにしたがうならば、公的空間における討論が革命を推進するのではなく、まず討論の場となる公的空間が創設されねばならない。この革命は公的空間の内部での討論ではなく、公的空間をめぐる闘争である。異なった意見を交換しあう公的生活は、敵を排除することによってはじめて可能となる。つまり近代社会において新たに公的な言論が成立するとき、そこではつねにすでに誰かが沈黙を余儀なくされていることになる。こうした状況において、公的生活の起源にある暴力的な闘争を前政治的ないし政治外的なものとして議題から除外するとすれば、それは単なる知的怠慢という以上に、その根源的暴力を忘却するという形でそれに加担することになりかねない。

しかし、翻ってルカーチの革命論の枠組みのほうに目を向けるならば、革命における暴力行使の容認は社会的なものの全体化という認識に由来している。なるほど一方において、政治的關係が経済的-社会的關係から切り離せない状況のなかで、R・ルクセンブルクがしたように、両者を理念的に区別することによって政治的領域の自律性を確保しようとするれば、革命の現実的な課題とその困難さを見落とすことになる。しかし他方において、ルカーチが考えたように、近代社会では言論の活動は商品關係に完全に依存してしまうのであろうか。社会構造は分化するのではなく、経済的-社会的關係へと一元化する結果として、政治的自由の再生の可能性は近代社会の絶対的な外部に求めざるをえないのであろうか。

いずれにせよ、資本主義社会において、政治的自由を可能な限り暴力的手段に頼ることなく再生しようとするとき、その社会において政治的なものと社会的なものとのどのような関連において構造化されているのかについての分析が要求される。その構造的關係性についてのイメージによって、政治的なものについての理解がシュミットのなものになるか、それともアレント的なものになるかは大きく規定されるように思われる。

¹ 「[近代の革命においては]『ローマを再び』創設することではなく、『新しいローマ』を創設することが問題であった。すなわち、西洋の歴史を永遠の都市 [=ローマ] の創設に結びつけ、さらにこの創設をギリシアとトロイの有史以前の歴史に結びつけていた糸は断ち切られて、もはや結び直すことはできなかった」(UR. 273/三三七 - 三三八)。

² アレントはこのような暴力を「根源的暴力」と呼び、それを制度的に表現したものが奴隷制であるという。「人間はこのような[生命の必然性からの]解放を、他人を犠牲にする暴力によって、すなわち自分の代わりに生命の重荷の一部を背負うよう他人に強制することによって、成し遂げた。これが奴隷制経済の本来的な意味である」(UR. 145/一六九)。

³ 共産党入党から『歴史と階級意識』に至る時期のルカーチの革命論については、伝記的研究、マルクス主義思想史的研究、フランクフルト学派的な研究などが大半を占めており、本章の問題視角に直接結びつくものは決して多くないが、アレント-ハーバーマスの公共性概念を参照基準にしてルカーチを取り扱っているものとして、cf. Rüdiger Dannemann, “Das Verdinglichungsproblem und Habermas’ Versuch einer Reformulierung,” in ders. (Hg.), *Georg Lukács — Jenseits der Polemiken: Beiträge zur Rekonstruktion seiner Philosophie*, Sendler, 1986; Oskar Negt und Alexander Kluge, *Öffentlichkeit und Erfahrung: Zur Organisationsanalyse von bürgerlicher und proletarischer Öffentlichkeit*, Suhrkamp, 1972; Joseph G. Fracchia, *Die Marxsche Aufhebung der Philosophie und der philosophische Marxismus: Zur Rekonstruktion der Marxschen Wissenschaftsauffassung und Theorie-Praxis Beziehung aufgrund einer Kritik der Marx-Rezeption von Georg Lukács, Karl Korsch, Theodor Adorno und Max Horkheimer*, P. Lang, 1987.

⁴ R. ルクセンブルクにおいて大衆の精神的墮落という問題は、ブルジョア社会のなかでのプロレタリアートの「ルンペン化 (Verlumpung)」の問題として扱われる。「あらゆる革命において非常に重要な問題の一つを形づくっているのは、ルンペンプロレタリアートとの闘争である。……ルンペンプロレタリア分子は、ブルジョア社会に深くくい込んでおり、単に特定の階層としてだけではなく、つまり社会秩序の壁が崩壊する時代にとくに歴大化する社会的なクズ (Abfall) としてだけではなく、社会全体を統合する要素としてくい込んでいるのである。ドイツでの——そして多かれ少なかれその他のすべての国家での——事の成り行きは、ブルジョア社会のあらゆる階層がいかに簡単にルンペン化に墮するかを示している。……プロレタリア革命は、いたるところでこうした敵および反革命の道具と闘わなければならないだろう」(RR. 361, Anm. 1/四四 - 四五)。

⁵ プロレタリアートの「ルンペン化」の問題に対しても彼女は同じように解答する。「とは

いえやはり、この点においても、テロルは切れ味の悪い、それどころか両刃の剣である。過酷な軍法会議はルンペンプロレタリア的な悪行の噴出に対して無力である。それどころか、戒厳状態の支配が続けばかならず専横をもたらし、そしていかなる専横も社会を墮落させるようにはたらく。プロレタリア革命の手中にある唯一の有効な手段は、ここでも次のものである。すなわち、政治的・社会的性質の最も根本的な措置、大衆の生活の社会保障の急速な変革、および——革命的理想主義の鼓舞である。革命的理想主義は、ただ無制限の政治的自由のなかで、大衆の集中した活動的生活によってのみ、長く維持されうるものである」(RR. 361, Anm. 1/四五)。

⁶ 彼女の革命論が決定的な点において「自然」とのアナロジーに依拠しているという事実は、次の箇所にも確認できる。「病気の感染と病原菌に対して日光の自由なはたらきが最も有効な消毒と治療の手段であるのと同様に、革命そのものとその修復の原理、革命によって呼び起こされた大衆の精神的な生活、活動性、および自己責任、つまり革命の形式としての極めて広汎な政治的自由——これが唯一の治療し消毒する太陽である」(RR. 361, Anm. 1/四五)。

⁷ R. ルクセンブルク批判が展開されるテキストとして本章で検討されるのは、「大衆の自然発生性、党の行動性」(一九二一年)と、『歴史と階級意識』所収の「ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命批判』についての批判的注釈」(一九二二年)である。

⁸ ルカーチに決定的な影響を与えた革命の挫折の経験としてまず挙げられるのは、彼自身も参加した革命によって樹立されたハンガリー評議会共和国の崩壊(一九一九年八月)である。しかし、彼のR. ルクセンブルク批判の直接の契機となったのは、一九二一年三月に中部ドイツで自然発生した労働者の蜂起(「三月行動」)の敗北である。当時、彼の戦術論的課題の一つは、周知の通り、レーニン主義的な前衛党論とルクセンブルク主義的な自然発生論とをいかに調停するかということにあったが、これを境に彼はレーニン主義的な立場へと傾斜していく。当時のルカーチの思想的変遷を、彼を取り巻く(党内外の)政治情勢と関連させて詳細に論じたものとして、cf. Jörg Kammler, *Politische Theorie von Georg Lukács: Struktur und historischer Praxisbezug bis 1929*, Luchterhand, 1974; Antonia Grunenberg, *Bürger und Revolutionär: Georg Lukács 1918-1928*, Europäische Verlagsanstalt, 1976; 池田浩士『初期ルカーチ研究』、合同出版、一九七二年; 『ルカーチとこの時代』、一九七五年、インパクト出版会、二〇〇九年。池田も述べているように、ルカーチは『歴史と階級意識』をまとめるにあたって、それまでに書いてきた政治論文のどれを納め、どれを除外するかの態

度決定をしており、また納める論文についても修正を施している場合がある。たとえば、本章で扱う「報道出版の自由と資本主義」、「議会主義の問題によせて」、「大衆の自然発生性、党の行動性」は『歴史と階級意識』には納められていない。しかし、このことは、これらの論文と『歴史と階級意識』とのあいだの連続性をルカーチが否定していることをただちに意味するわけではない。（池田もむしろ一貫性を主張しているように思われる。Cf. 『初期ルカーチ研究』、二二-二三頁；『ルカーチとこの時代』、八八-八九頁。）諸論文の取捨選択やテキストの修正は、レーニンやコミンテルンからの批判を意識した連続性の隠蔽（否定ではなく）を意図したものであると解釈することも可能であり、少なくとも本研究の問題視角から見れば、両者のあいだの連続性が際立つように思われる。事実、R. ルクセンブルクに関する二つの論文は、「本質的な変更なしに」（VLW. 18/四〇九）『歴史と階級意識』に納められている。

⁹ 人間関係が「純社会的な」ものに転化することによって近代資本主義社会が成立する過程を、ルカーチは「社会の社会化過程」と呼ぶ（GK. 192/五六）。

¹⁰ ハーバーマスはルカーチのいう物象化を「生活世界のコンテクストの物象化」として理解している。それは「労働者たちが規範と価値を介してではなく、交換価値という非言語化された媒介を介して、自分たちの相互行為を調整するとき生じる」。Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 1981, Bd. 1, Suhrkamp, 1995, S. 480. 徳永恂・平野嘉彦他訳『コミュニケーション的行為の理論』中、未来社、一九八六年、一一八頁。

¹¹ ここにおいても、ルカーチの革命論とシュミットの「政治的なもの」の概念との共通性が見出される。ルカーチはこう主張する。意見を交換する「討論」という形式では、「事象に即して (sachlich) 鋭く分離し、相互に排除しあっている」集団が「平和に並んで生活することができてしまう」（GK. 475 - 477/四八八 - 四九一）。この主張と、シュミットの次の主張を比較せよ。「自由主義は、それに特徴的な精神と経済のディレンマにおいて、敵を、商売の側面からは競争相手に、精神の側面からは討論の相手に解消しようとしてきた」。「闘争という政治的概念は、自由主義的思考にあっては、経済的な側面では競争に、他方「精神的な」側面では討論と化す」（BP. 28, 70/一七一一八、九一）。シュミットの友と敵の区別としての政治的なものの概念が、ルカーチの敵概念をも含意していることについては、本研究第二章1-2参照。

¹² もちろんルカーチは党と大衆の「相互作用」を強調する。しかしそれにもかかわらず彼が組織を「予防措置」ないし「前衛」としてとらえるとき、それがいかに絶対的な存在で

あるかがかえって浮き彫りにされる。

¹³ ここまでの「評議会」樹立に関する議論は、「議会主義の問題によせて」（一九二〇年）において展開されているものである。

¹⁴ Andrew Arato and Paul Breines, *The Young Lukács and the Origins of Western Marxism*, The Seabury Press, 1979, pp. 107 and 156-160.

¹⁵ ルカーチはハンガリー共産党入党を決断する際に「戦術」という観点を獲得した。ルカーチにおける戦術と暴力肯定との関係については、本研究第四章も参照。

¹⁶ 活動を制作に置き換え、新しい政治体を「作る」という表象を生み出したのはプラトンの政治哲学であるとアレントはいう。しかし彼女によれば、制作に伴う暴力が政治的領域の全体に侵入したのはやはり近代の革命においてである。近代の革命と暴力との結びつきは、生命の必然性や貧困だけでなく制作の観点からも強化されたのである。Cf. VA. 288-291 / 三五七-三六〇, PF. 139 / 一八九-一九〇. 暴力と目的-手段のカテゴリーとの関係、および暴力と制作との内在的結びつきの詳細については、cf. PF. 110 - 112 / 一四九-一五二, CR. 106 / 九四, 150-151 / 一三三-一三四.

¹⁷ 「官僚制とは、生活と労働の様式が、そしてそれに対応して意識もまた、資本主義経済の一般的な社会的 - 経済的諸前提に適応する、ということの意味する」(GK. 273 / 一八五)。ルカーチの官僚制批判がヴェーバーの分析を前提にしていることはいうまでもない。